
妄想勘違い君

kakio

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妄想勘違い君

【ZPDF】

Z5136F

【作者名】

kakio

【あらすじ】

あまりにいたくない馬鹿らしさに苦。

雨は永遠に続くのか？とふとおもった。自宅の一階の窓から見える景色は一週間ほどんど代わりばえがしなかつた。今は夏休みで梅雨明けなんて当の昔に終わっていはずだった。陰鬱な分厚い雲が空を覆いつくし、太陽の欠片すら見当たらぬ。十分ほどして窓の外に注意を払つても晴れるわけがない、と諦めてベッドの上に寝転がつた。

8月3日。何の味氣もないカレンダーを意味もなく眺めた。休みがはじまつてすぐに雨が降りはじめ、計画は伸び伸びになつていた。7月31日にそれは行われる予定だつた。晴天でなければ実行しない。そりややろうと思えばやれるが。もどかしさを抱えながら悶々としているわけだ。

窓に打ち付ける雨の音がはげしくなり、さうに気分が滅入つてきた。外に出る氣も起きない。どうしたものかと考えるが全くもつてやりたいことが思い付かなかつた。宿題なんて論外だし、読み始めた本はあまりに退屈でまどの外から投げてしまつたし、やりかけのゲームも行き詰まつてストレスがたまるばかりだつた。

奴らもあれを終わらせないことは落ち着いてはいられないんじやないか。俺ほどじやないだろうけど。ユウジ、ダイスケ、ヤヨイ、マリ、リサコ。何やってんだろうなあいつら。あれから誰からも電話はない。天井の一点のシミを集中して眺めていたときに「ピンポン」と鳴つた。一体どれくらいの時間眺めていたのか、まったくわからなかつた。呼び鈴がならなければそれこそ延々とその状態に釘付けされていたかもしれない。救われた気持ちで玄関にむかう。

訪問者はリサコだつた。ブルーのプリントシャツにホワイトイジンズという清潔感溢れる服装がとんでもなく似合つていた。清涼飲料水のコマーシャルにいつの間にか出演していくも驚かないほどの美少女だ。が、傘も差さずに来たのかびしょ濡れだつた。びしょび

しょ美女だなおい、と「あんた毎回私を凍えさせるのやめてよねー
つてなリアクションを期待していたが、全くの無言だった。

「どうあえずタオル持つてくるから待つてろよ」

洗面所に行きかけるとTシャツの裾をリサ口がとつとこ握つてこ
ういった。

「五人とも消えちやつたの。三日前から」

7月31日に五人消えた？　あの日、ダイスケから午後5時「いろ
に今日は中止だという電話を貰つた。ふと何かが頭をよぎる。」

「あいりサ口、俺に隠れて階で何かやつてたんじゃないだろうな
と聞こえる。？」

洗面所のドアに寄つ掛かりながらりサコに質問した。ドアの向こ
うで、俺のTシャツと短パンに着替えようとしているリサ口の動き
が止まつた気がした。一瞬の静寂を置いて、また衣擦れがしめる
と聞こえる。

「またしかにねーあんたには悪いんだけど爾でもいつか一つて
ことになつてや、やつちやつたよ」

なんのことだよオーマイガ。計画をたてた俺がハブられるとは

！

「大成功でさーもうこんな信じらんないつてばらう上手く行つ
たよー」

「何で俺だけハブられたんだよ？」

「だつてあんた、まだこっちに未練ありそつだつたじやん私らとちがつて」

それは童貞がつてことか？ んなもんあるわきゃないだろーが！

野外乱交を考え付いたのは俺だった。公園で一夏の思い出をドカンとうちあげようぜーというのが俺の提案だった。まあどうくさ紛れで童貞脱出つてのが本当の狙いだったが。

「暗くて何やってるかわかんないし、ギャラリー来たり、警察いつ来るかってなスリルあつていいんじゃん？」ヒヤヨイ。俺は正直、夏の予定など何一つなかつたので、やけくそ気味のでたらめな俺の妄想に賛同の意が表されるとはおもつてもみなかつた。半分ジョークで半分マジだった本音を言えば。ヤヨイ発言に度肝を抜かれた俺以外全員恋人がいるつてのに皆さんやる気マンマンつてのも驚きだつたが、若いんだからしかたないね、とやつたこともない俺は悟つたものだ。

そのお楽しみからハブられた俺以外の奴らが消えたと。リサコ以外。着替え終わつたリサコが洗面所の扉を引き、体を預けていた俺は当然後に倒れこみ、リサコの胸に後頭部から突つ込んだ。ああ、結構大きいんだな、と弾力を感じたあとすぐに床にそのまま落つちて、後頭部を痛打した。目が飛び出るかと思つた。

「が…おい、そのまま落とすことないだろうが！」

「あたしの胸に触れといで何言つてんのよこの馬鹿！」

頭を抱えて、この乙女があ、馬鹿みたいに美人だからつて何でも許されると思つてんじゃねえぞ、と文句を言おうとして氣づいた。白っぽい無地の薄いシャツから、

「おいおい、透けてんぞ乳首が！」

「もおブランジャー濡れてるんだから仕方ないでしょ？　じるじるみないでよ」

「んな」といつたつてみちまうぜ。って今はそんな場合じゃなかつた。

「なあパーティーが終わつたのは何時」」「うだ？」

「10時ぐらいだつたんじゃないかなー。携帯のメールチェックしたときたしかそうだつた」

なるほど。いや、待てよ五人消えた？　ひとり足りない。

「ゲストでも呼んだのか？」

「ああ、カズヒロ君。なんか彼が雨の日でも是非やるべきだよ！つてダイスケに熱弁奮つてやることになつたようなもんだから」

2年3組の梨田和弘か。苗字は違うが名前が同じだから妙に悔しいじゃねえか。2年4組の集まりに割り込んでくるとはふざけた野郎だ。いやいや、今はそれは置いとこう。あいつも含め、五人いなくなつたんだからちょっとは神妙にしねーと。

「私は雨に打たれながらそんな感じだつたからもういいよね？つてかテレビみたいんだけど」

階段をズカズカ上つて俺の部屋へ勝手に入つていった。あーそう

ですか。なかなか薄情だがここまで行くと清々しいとまで感じるな。数人で俺の家に遊びに来た事はあったが、リサコ一人というのは初めてだつたそりいえば。そう考えるとなんとなく緊張してくる。まあ落ち着け。親も仕事で夕方まで帰つてこないが落ち着くんだ。第一、今は五人がどうなつたかだ。俺も階段を上り、自分の部屋へ入つた。

午後の頭なんてワайдショーグラビーシャツでないらしく、たまにザッピングをしながら「全然おもしろいのやつてないじゃーん」とか言いながらも結構真剣に見ているようだった。

「といひで付き合わない？」

出し抜けにそういうつてみた。脊髄反射にNO!-じゃなくてyes だつたことにこれまたビックリ。

「わりとあんたのこと好きだしー」「彼氏は?」「飽きたから別れる」「

明日は我が身だなと思いつつ、「家族はどうしてんだよあいつらの? 大騒ぎしてんじゃねーの?」

「いやーあいつらいつもフラフラしてたからそんなないみたいよ。私もだけど」「

どうなつてんだ近頃の若者はーと自分を例外として、どつかの親の変わりに溜息をついてやつた。まあねえこいつらも将来同じ思いをするんだろうから許してやってください。

「はあ一つ一かよ、野外乱交に参加してない俺があいつらの事わざわざ心配するのが馬鹿馬鹿しくなつてきたよ

「うるさいもつじ。今聞き捨てならない言葉聞いた気がしたんだけど」

「だから、野外乱交パーティだよ。お前も参加したさじやねーのかよ?」

「つたぐ何言つてんのよこの馬鹿! 野外乱闘でしょ? そんな私が参加するわけないじゃん。なめてんの?」

「ウン」「ウン」「ウン」確かに似てるが…。

「つて事は何? お前等、乱闘したわけ? あの雨の中?」

「だからやつたつていつてんじやん。五人消えたのよこの世から

電話の内容を思ひ出していた。

「よお 今日雨だからやらないみたい。残念だけど晴れるまで待とつば。爾のまうがヤリやすくなるような氣もするけどな。足音も消せる」

「なに? センタープレイとかそんなんあるわけ?」

「まあな。ま、機会を待とばせ」

「やつやすくなる。殺りやすくなる。足音も消せるし…。何? こいつ等殺しあいをしたかったわけ? どうなつてんだ馬鹿野郎。」

「まああたしらはそういうの別に構わなかつたのよ。死んだって

別にね。あんたはそういうの全くなかつたでしょ？だから、言い出したときは何とち狂つてんの？ なんておもつてたんだけどね。乱交ねえ、馬鹿でしょあんた？」

「……」この世から消えたつてことまだじやあ

「もちろん死んだの。当たり前じゃない。JFOにさらわれて消えたとも思つてんの？ 私は生き残つたの。ここにいるんだからわかるでしょ。死体は火炎放射器で燃やして、骨はハンマーで碎いたあと海に撒いた。なかなかいい場所じやん。海つて

ワイルドだな、火炎放射器とは。まあいか。正直どういう手口で殺したとか何とか聞きたくないし、ていうか聞いたら俺まで殺されそうだ。ワイドショーを見たくなる気持ちもわかるよそつや。

つてことで俺とリサコはベッドにまじつていつたとや。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5136f/>

妄想勘違い君

2010年10月20日02時21分発行